

令和七年二月吉日初版作成

奥の奥の「私たち」になる

高嶋善三郎

目次

- 奥の奥の「私たち」になる・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- 現われの自分はいくつもある・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
- 本当の自分にも奥の奥がある・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
- 神様の方へ想いを向ける大切さ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
- 新しい波動の巡ってくるのを邪魔するもの・・・・・・・・・・ 7
- 神々のあらゆる光が総合して生きている私たち・・・・・・ 8

お願い

既に作成した資料（バックナンバー）は、ウェブサイト『白光北陸』のブログ欄に掲載しています。

より分かりやすくするため、ご感想があれば、お聞かせください。

次の連絡先にお問い合わせ致します。

（スマホ）090-3346-6619

（メールアドレス）zensan@peach.ocn.ne.jp

伝わっているという事はここに居るという事と同じです。それを一人だと思っている。一人じゃないです。だから私は大概お話をしているとき「私たち」といつているでしょう。私はというのはあまり使わない。

私という一人はいないですよ。体から言えば私だけけど、働きとしてはすべて「私たち」なんです。私「なんていう個人はいないんです。個人があるという人はまだ悟っていない。判っていない。なんの誰某（なにがし）という人がここにいて、それがやっていたなって思うけどね。私たちがうんと集まって大きな「私たち」になる。そうすると気が楽だし、カもつくし勇氣も出る。だからつまらない「私」たちにならないで、奥の奥の「私たち」にならないといけませんね。」

現われの自分はさういふもの

(質問) 自分ではスーッとしているように気持ちの時とさうじゃない時、その程度しかわからないのですが、消えてゆく姿と世界平和の祈りをやわらわして、消えてゆく姿の想いの座というのが仮定されるのですが。

「先生（そ）がなびますかしてさういふね。悪い自分はさういふへ行ってさう

て、悪いなあ、と思うときの自分はここに居るんだらう、と思うでしょうね。そのところが面白い。自分というものがいくつにもいくつにも分かれているんです。奥の自分と表面の自分と中ほどの自分と、時計の振り子のように動くでしょう。振り幅の範囲があるわけですよ。その範囲の中に記録されているものがたくさんある。それがヒョッ、ヒョッと思いうんですね。

その揺れ動く幅を10に分ければ、9のところでもなければ5のところでもなければ、1のところでもない。現われの自分は、振り子のように年中動いているから、道のようなものが、波がついているわけです。そうすると1の点の自分が思ったり、3の自分、5の自分、6の自分、8の自分が思ってみたりするわけです。だから想いの現れの世界の自分というものは幾つもあるんだ、という事です。

本当の自分は一つ。奥にある。その自分というのは神我一体の自分です。その奥をいけば、宇宙神になっちゃう。宇宙神を田とすればその中に自分がある。その自分だけが本当の自分なんで、後の自分は現れた影絵に過ぎない。悟らうが、悟るまいがそんなものは影絵に過ぎない。」

本当の自分にも奥の奥がある

きて自分の言葉として出てくる場合には光ってくるんです。本当に思っているからから溢れ出てくるから相手を打つんですよ。たとえ言葉の使い方が間違っていてても中味が伝わっていくのですよ。いへる言葉が折の目正しくても、中味が一つも伝わらない場合もあるでしょ。

それは知識になって溜まったもので言うから、いへるうまいことをいっても相手を打たない。拙くても、奥から湧き出てくるから相手を打つ。だから教養のないおはさんの云った言葉でも胸を打つ場合もあるし、学者の言葉でも胸を打たない場合もある。

中から湧き出てくる、というのがそれはどこから湧き出てくるか、奥の奥が一番深い奥から湧き出てくればしめたものです。そうでなくとも中から出てくればいいですよ。中から出てくるというのは空から出てくるのです。中からといっても幅があって、空の、空のまた空のという所があるんですよ。成りたての空の中から出てくるのか、どこまで行った空から出てくるか、空の奥処におくど（くのみ心のまみ、出てくるかね。「

以上のお言葉の中で、神我一体になった、真実の自分においても、その奥があり、それが宇宙神だと言われています。

■頭境れの自分と真実の自分の違いについて、言及したところですが、

私たちは、私たちの意識を置いた自分で自分を見ている。例えば現われた不安恐怖の想念に意識を置く、その想念行為を体験している自分から自分を見ている。また悟った意識に自分を置くと、悟りを体験している自分から自分を見ている。そして「これも消えてゆく姿だな」とその自分を放手すと、一段階奥の自分に進化してゆくと言われるのです。それゆえ、私たちの魂の進化のためには、常にどの自分で自分を見つめているか、を反省し、消えてゆく姿で世界平和の祈りをしていくことが大切だと言われているのです。

神様の方へ想いを向ける大切さ

現在私たちが神聖復活をしようとしているのは、宇宙神の分身たる私たちが、愛と調和の世界をこの未開の地球世界に現わそうとして降りてきたときに失った直観力を取り戻すためのものなのです。

人間が何故それらの力を失い、肉体人間そのものになり下がったのかといえば、霊・魂・魄として三界に活動しているうちに、肉体外の六官（直感）直覚（神智）の衰えを見せ、すべてを五官の感覚にのみ頼るところが習慣づけられ、五官に触れぬものは無いものと思ってしまうようになり、人

間とは肉体であり、心（精神）とは、肉体の器官が生み出した働きであるとして、分霊の活動は分霊そのものとしては感じられぬようになっていったからであると言われています。

神様の方に想いを向けて置く生活がいかに大事かということは、宇宙子科学的に説明されています。

「この世はすべて波動で成り立っているので、精神波動と物質波動の調和によってこの世は完成してゆく。精神波動にしても物質波動にしても、常に新陳代謝しているのです、古い波動を把えつつけていては、新しい波動の巡ってくるのを邪魔してしまうことになる。その新しい波動というのは、宇宙神の心から生まれてくるのである。

その最初の波動を出すところを、宇宙子科学では宇宙核といい、その波動の最小単位を宇宙子と呼んでいる。

精神波動にしても物質波動にしても、古くなると、活れてきて、本来の働きができなくなる。それは、細胞が古くなるから、老衰現象が起こる、地球科学の細胞の説明と全く同じで、精神波動でも宇宙核の中から絶えず、宇宙子の補給を受けていないと、精神波動が汚れてきて、理非判断ができなくなる。そして人類への迷惑にも気づかず、原水爆実験を

つづけてゆくようなことになってゆく。

理性が曇るのも、直感が鈍るのも、すべて、宇宙子波動の新陳代謝がうまくできていないからである。そこで、常にその新陳代謝をうまくやるように、人間の想念はいつでも宇宙核（神様）の方に向けておくことが大事なのである。」「白光誌1963年5月号』

新しい波動の巡ってくるのを邪魔するもの

新しい波動の巡ってくるのを邪魔してしまう古い波動を把えつつけている想念行為は、どういふものなのでしょうか。

そのヒントになる言葉が、『コンネスの言写真 私は聖ジャーメインなるものである』111ページ（アシェイマリ・マクナマラ著）においても次のように解説されています。ここでは、本心を内側の静寂、あるいは内なる源と言い換えられ、邪魔する想念行為を二つ指摘し、その解決へのヒントが示されています。その要点を整理します。

第一に肉体の心は、目の前の混乱に出会うと、瞬時に情報を取り込んで、それを理解しようとして細かく分析し、苦痛を生み出すものを探し求め、そしてさらなる問題という新天地にあなたを連れていき、それらの問題

をさらに理解しようと探し求めつつけてしまう。

第二に、自分に接している人たちの、自分に対する個人的見解に把われ、それに振り回される。幼児は、人にどう思われようと気にしない。自分のことを人に認めてもらう必要もない。しかし大人になったあなたは、(なんの防御もしないため)他人の個人的見解(分別心―肉体の心)に基づいた、あなたへの観方を無意識のうちに受け入れてしまう。しかしそれは、他人の見解にエネルギーを与えたことになり、その観方に把われ、何かにつけ自他を責め、裁いてしまう。あなた方の多くの人はいまだに夫あるいは妻、友人、マスメディア、周りの人たちの、自分に対する個人的見解を受け入れ、自分自身の心を、善悪や美醜など相對の、三次元世界の檻の中に閉じ込めている。

そして、これらの想念行為を手放す方法とこれによって得られる結果について、その原因を示し、次のように解説されています。

このようになったのは、肉体の心の働きであるが、そのもとは、すべて内側の静寂(本心)からくるエネルギーであり、エネルギーはあなたの選択と注目に従って意のままに動くことを忘れてしまっているからだ。この真理を理解し、世界中のガイドや導師のサポートを得て、他人の自分に対する意見を手放し、内なる源(本心)にあなたを導かせる時、

あなたの内なる源の波動があなたの外に現れ、あなたの周りのエネルギーは驚くほどシフトする。

人生は美り多いものとなり、必要なすべてのことが、たやすさと流れと恩寵と共に現われてくる。

五井先生流に言えば、真実の自分(生命の本源の世界につながっている自分―本心)を知り自覚し、現れの自分(肉体頭脳知識や頭脳に残っている体験で知る自分―肉体の心)と区別して、真実の自分(本心―内なる神様)の方に想いを向けてゆけば、真実の自分に自分を導かせる。即ち神にすべてを全託することになります。誤てる想念(カルマ)は、すべて光の中に消えてゆき、人生は驚くほど愛に包まれ、己自身、これまで発揮できなかった能力や素質が自然と現われ、喜びと愛に包まれた人生となって来る。そして自分の選択と注目に従って意のままに即ち自由自在に動いていた時代の自分を思い出し、この肉体界に身を置きながら、己の神聖を顕現するということとなります。

神々のあらゆる光が総合して生きている私たち

今回の五井先生のお言葉の中に、「自分というのは、一人じゃなく、神々のあらゆる光が総合して生きている」という表現がありますが、どういう状態を言及されているのでしょうか。それを理解するのに、ヒントになるお言葉が『白光への道』と『真の幸福』に説明されています。

「神は大生命であり、大霊である。この大霊が、七つの霊に働きを分けて、いわゆる職能というか、働きの特色というか、使命というか、ともあれ、七つの色に分かれた。これを七つの直霊という。この七つの直霊が各自のいのちを働かし、互いに交流し合い助け合って、この人類世界に、やがて神の世界を完成しようとしている。

この七つの直霊から、分霊が生まれ、その分霊から又分霊が生まれているが、その分霊たちは、いずれも、七つの直霊の、いずれかの特色を強くもち、後の六つの要素は、その特色の裏面で、この特色を助けて働いているわけで、各分霊がそうした一つの特色と、六つの補助的働きをもって活躍している。

例えば、紫の働きをもつ直霊から生みなされた、紫の特色をもつ分霊は輪廻転生を繰り返しながら進化向上の道をたどっていくその過程において、本来の特色である紫の本質的働きは変わらないが、その特色は内に隠されて、今生においては補助的働きの一つである青の要素を強

く表に現わしているかもしれない。しかし人間は自分の特色の他の六つの要素の働きを、その時その時に体験としてマスターしながら、本来の特色を深めつつ、人間的にも調和完成された姿となって直霊に帰一していく道をたどっていく。」と。

また『真の幸福』においては、「人間各個人は、神の分け生命として、大宇宙のあらゆる立場を経験として知り、次々と神の中心の立場に近づいてゆくのだという偉大さは、その事実を想うだけで、心が広々としてくるのである。只単に、この地球界の物質世界における幸、不幸だけに把われて一喜一憂していることは馬鹿らしいことで、じっと心を静めて、大神様のみ心の中をみつめてみる必要がある。そのみつめる方法がいのりなのである。」と解説されています。

これらの言葉を実感として受け止められるようになった時、私たちは人間神の子観の真髓を体得したということになるのでしょうか。

冒頭の五井先生の歌で、「己は澄みて」という箇所がありますが、私たちの意識は、今どの自分に置いているのでしょうか。消えてゆく姿で世界平和の祈りや神聖復活の印などをとおし、奥の奥にある自分をめざして、精進していきたいものです。